

## 太鼓を通して生まれるつながり

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部社会学科文化人類学分野 公開日: 2024-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉仲, 琉星 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/0002000602">http://hdl.handle.net/10297/0002000602</a>

# 太鼓を通して生まれるつながり

吉仲琉星

- 1 はじめに
- 2 久能太鼓保存会の概要
  - 2.1 保存会発足の経緯
  - 2.2 演奏する楽曲
  - 2.3 メンバー
  - 2.3 活動
  - 2.4 東照宮との関わり
- 3 太鼓を通しての人間関係の変化
  - 3.1 関係の始点として
  - 3.2 保存会の継続に向けて
- 4 考察
- 5 おわりに

## 1 はじめに

本章では、1996年に久能で発足した久能太鼓保存会（以下、保存会とする）の活動について記録するとともに、保存会に参加する人々にとって保存会がどのような場所として機能していたのかについて、インタビューを通して明らかにしていく。

フィールドワークの計画を立て始めた頃、私は久能の歴史に興味を持っていた。それらについて調べていくなかで、私は「久能太鼓」のことを知り、保存会に興味を持った。当初は昔からある歴史や伝統のある太鼓であると思い、その保存会がいかに伝統と向き合っているのか、保存会の活動内容やメンバーがいかに変遷してきたのかについて調べたいと考えていた。しかし、実際に調査を進めていくうちに、保存会は私が考えていたよりも新しい組織であることがわかった。それゆえ、発足時からの活動の経緯や、保存会が久能の人々にとって太鼓クラブということだけでなく、どのような役割を持つ場となっているのかという問いを調査テーマに設定した。

以上の問いを掲げる本章では、次節において保存会発足の経緯、演奏している楽曲、メンバー、活動内容などについて記述し、保存会の概要を把握する。また、調査を進めていくなかで保存会には、久能で生まれ育ったわけではなく、結婚を機に久能へ移住してきた経歴を

もつメンバーが多くいることがわかった。そこで第 3 節では、そういったメンバーの語りを取り上げ、久能地区外から移り住んできた人にとって保存会がどのような場所であったのかを明らかにする。そして、第 4 節では保存会が移住してきた人にとって関係を生み出す場となった要素について考察する。

## 2 久能太鼓保存会の概要

本節では、保存会発足に関わりのある人物への聞き取りと文献資料から、保存会の概要、歴史について述べていく。第 1 項では、保存会が発足するに至った経緯、発足時の状況について、第 2 項では、保存会が演奏する楽曲とその特徴について記述する。第 3 項では、メンバーの数とその推移に触れ、続く第 4 項では、保存会のこれまでの活動内容を見ていく。第 5 項では久能山東照宮との関係について記述する。

### 2.1 保存会発足の経緯

久能太鼓保存会は、1995 年に当時の久能連合町内会（以下、連合町内会とする）会長であった海野安男さんが静岡市内のホテルで開かれたディナーショーに参加したことがきっかけで発足した。海野安男さんが富士宮市で活動する「エンゼル」という太鼓のチームの演奏に感銘を受け、久能の太鼓を復活させたいと考え発案したためだという。連合町内会に属する安居の自治会長を当時務めていた川島丈さん（男性、80 代）によれば、久能の 6 町内会にはもともと太鼓を演奏する伝統があったが、1995 年時点において安居以外では途絶えてしまっていたという。このような状況において、海野さんの提案により 1996 年に連合町内会の役員会において、地域の活性化、伝統的な太鼓の伝承、青少年の健全育成を目的とした、連合町内会に所属する組織として保存会の発足が決定した。組織の発足にあたって必要となる初期費用、メンバーの募集や太鼓などの道具の購入が行われた。初期費用は、久能や隣の大谷地区と関わりのある市議会議員の伊東稔浩さんを通して静岡市と掛け合い、助成金の交付を受けたほか、各自治会、住民からの寄付金を募り確保した。

また、各自治会がメンバーを募集し、連合町内会に属する西平松から 3 名、安居から 5 名の計 8 名が参加し、1996 年 5 月 25 日に発足会が行われた。発足後は 1997 年の静岡市立久能小学校体育館の落成式で演奏を披露することを目標として練習を始めた。しかし、太鼓の経験があるメンバーが少なく、経験のあるメンバーも経験が浅く、初心者を指導することはできなかった。そこで、安居太鼓を長年演奏していた経験者である 2 人を指導者として招き、昔から縁日で演奏されていた太鼓の指導を受けた。その後、海野安男さんが伝統的なものだけでなく、新しい太鼓の演奏を創作したいと考えたことから、同年の夏ごろから富士宮市の太鼓チーム「エンゼル」で指導していた鈴木孝長さんを招き、新たな楽曲の作曲、メン

パーへの練習の指導を依頼した。鈴木さんにより久能の伝統的な太鼓のリズムを組み合わせアレンジした「伝々太鼓」や、オリジナルの楽曲である「久能太鼓」、伝統的な太鼓のリズムを取り入れた「家康出陣太鼓」が作成され、これらを独自の楽曲として演奏するようになった。

## 2.2 演奏する楽曲

久能太鼓では、前述した3曲に加え、メンバーの1人である海野伸光さん（男性、70代、西平松在住）が作曲した「祝い太鼓」、「久能の舞」などを演奏しているほか、伊豆諸島の三宅島で打たれていた「三宅」のように、他地区で演奏されている楽曲の演奏もしている。

久能の伝統的な太鼓は3曲あり、共通するリズムを「でんでこでんでこ」と口頭で伝えていることからまとめて「伝々太鼓」と呼ばれる。しかし、いずれも5秒ほどのフレーズが繰り返されるシンプルな曲であり、すべてを演奏しても演奏時間が短いという問題点があった。アレンジした「伝々太鼓」では、元の3曲を基本のリズムとしつつも強弱をつけた打ち方や宮太鼓（最も一般的な形状の和太鼓）と大太鼓（宮太鼓と同じ形状だがより大型の和太鼓）との繰り返し、一部に振り付けをつけ、異なるリズムを追加することで、3分近くの曲となっている。オリジナルの楽曲である「久能太鼓」は、久能山東照宮、駿河湾、石垣いちごなど久能の名勝や自然、特産物などを表現した独自の楽曲であり、宮太鼓と大太鼓の掛け合いの形式で演奏される。伝統的なリズムを取り入れたもう1つの曲に、「家康出陣太鼓」がある。これは、「久能太鼓」が中学生によって演奏されることを想定していたため、大人のメンバーが打てる曲が欲しいという意見から生まれた。そうした制作の経緯から、メンバー間では「親父太鼓」とも呼ばれている。太鼓を横向きに配置し、太鼓の間に打ち手が入って演奏する横打ちと呼ばれる打ち方が特徴の楽曲となっている。

## 2.3 メンバー

保存会のメンバーは大きく子どもと大人に分けられる。これは、「久能太鼓」という楽曲が子どもが演奏することを意識して作曲されたこと、「家康出陣太鼓」がそれに対して大人たちが演奏する楽曲として製作されたことによる。保存会発足時の8名は全員大人の男性であったが、「エンゼル」の鈴木孝長さんが指導に参加した際に、子どもたちに打ってもらいたいと要望したことで、子どもたちが活動に参加するようになった。

また、保存会発足当初のメンバーは、久能出身の女性と結婚し、婚家のある久能に移り住んだ男性が比較的多かった。発足時のメンバーである長島康晴さんによると、最初の頃は周りの住民から「婿太鼓」と揶揄されたこともあったという。

なお、メンバーは2005年の大人15名、子ども16名を最盛期として、それ以降は減少し、現在は大人11名、子ども3名となっている。そのうち、現在も久能に住んでいるメンバーは大人3名のみで、その他のメンバーは大谷地区など市内の別地区、もしくは焼津市など市外からの参加者となっている。現在は辞めてしまったが、かつては島田市や沼津市とい

ったかなり離れた場所から参加していたメンバーもいた。こうした久能以外のメンバーは、2000年代後半ごろから参加するようになったそうで、活動初期から参加しているメンバーである海野伸光さんの話では、「外部のメンバーの参加を拒否する動きも当初は存在していたが、メンバーの減少が始まってからは組織の存続を優先するようになった」という。

## 2.4 活動

久能太鼓保存会の主な活動には、週に1回行われる練習と、久能で行われるイベントでの演奏がある。練習は久能小学校の校舎1階の玄関口近くにある広場にて、毎週日曜日の19時から21時まで行われている。私も2023年の5月から9月にかけて計11回、保存会の練習を見ることができた。

毎回の練習は19時から開始となっているものの、実際には19時以降にしだいにメンバーが集まるといった様子であった。また、練習に毎週参加するメンバーが少なく、週によって参加する人数が異なっているなど、緩やかな雰囲気練習していた。練習ではメンバー同士が雑談を交わしながら、演奏曲を通して演奏するなどしていた。参加者が多い場合には、その前に太鼓を一定のリズムで叩く基礎練習も行っていた。現在は週1回の練習となっているが、小学生や中学生など子どものメンバーが多かった時期は、大人が練習する日を日曜日、子どもたちが練習する日を土曜日とし、週2回で練習していた。

イベントでの演奏は、毎年定期的に行っているものと、外部から招待され演奏する不定期のものがある。毎年行っているものは久能海岸沿いの国道150号線の近くで元旦の朝から演奏する「元旦初打」や、久能山東照宮の観月祭や節分祭、西平松で開催されている夏祭り、特別養護老人ホーム「久能の里」で開催される敬老会、久能学区での運動会、10月に開催される天羽衣神社の大祭など、久能で開催されているイベントが多くを占める。不定期での演奏も久能に関わるイベントでの演奏が多い。主なものは総合温浴施設のリバティリゾート久能山で開催されるイベントや保存会に所属するメンバーの結婚式などであるが、1997年には保存会が当初目標としていた久能小学校体育館の落成式（静岡新聞1997）での演奏があった。また、久能は久能山東照宮がある有度山のふもとに位置するため、久能山や徳川家に関わるイベントでの演奏も多い。静岡市南中学区青少年健全育成会発行の『育成会だより』第43号（静岡市立南中学校区青少年健全育成会2002）やメンバーから聞いた話によると、1998年開催の徳川慶喜展開会式、大河ドラマ「葵 徳川三代」にちなんだ博覧会で2000年で開催された静岡「葵」博、2015年に開催された久能山東照宮400年祭などがある。ほかにも、保存会は静岡市太鼓連盟には所属していないが、太鼓連盟が参加するイベントに連盟に所属する団体として招待され、参加しているという特徴がある。保存会は、静岡市太鼓連盟から加入の勧誘を受けたが、メンバーの多くが農家であり曜日にかかわらず仕事をしていることが多く、イベントに参加することが難しいため加入を断った経緯がある。しかし、打ち手の代表である西岡茂さん（男性、70代、西平松在住）が静岡市太鼓連盟の会長と個人的につながりがあったため、太鼓連盟が参加するイベントに久能太鼓も参加し

ないかと誘いを受けることがある。それゆえ、連盟を通して静岡まつりや浅間神社で行われる廿日会祭、静岡マラソンの応援演奏などのイベントに参加している。



写真1 リバティリゾート久能山のイベントでの演奏の様子  
(2023年10月22日、吉仲撮影)

ところで、太鼓は音が響くため、周辺の住民に迷惑のかからない場所で練習しなければならず、かつ多くの太鼓を収納できるスペースが練習場所には必要である。また、久能と名がついているものであるから地区のどこかで練習したい、という意見もあった。それらの条件を満たすことから、久能小学校が最も適した場所という話になり、小学校の教員らと交渉し、正式な練習場所として玄関口近くの広場を練習場所として借りることが保存会の発足後すぐに決まった。しかし、1階の玄関口近くでは音が響くとの意見が小学校側からあり、練習場所はすぐに4階の教室へと変更された。4階で練習していた期間は5年ほどだった。初期からメンバーとして活動している海野伸光さんによると、「外で演奏するとき、太鼓を練習場所の4階から運搬用の車両に乗せるまで人力で運ぶ必要があり、演奏後にまた4階まで戻さないといけないのが演奏よりも辛かった」とのことで、4階での活動は負担が大きかったようである。しかし、その後はまた1階での使用許可が出たため、練習場所は元の玄関口付近の広場に戻った。

太鼓は保存会が発足したときに購入、寄贈されたものと、発足以前から久能小学校に保管されていたものが現在使用されている。保存会発足時には大太鼓1張、平太鼓1張、宮太鼓5張を新たに購入した。締太鼓(両面の皮をひもで結び、胴に締めつけた小型の太鼓)2張は当時の連合町内会長だった海野安男さんが寄贈した。また、久能小学校にはそれ以前から宮太鼓5張が保管されており、保存会が久能小学校で練習するようになってからは、これらの太鼓を学校から借りて使っている。なお、発足時に太鼓を購入して以降は、鐘の追加購入こそあったが太鼓の追加購入はなく、現在14張の太鼓と1個の鐘を演奏に使用してい

る。

## 2.5 久能山東照宮との関係

先述した久能山東照宮での演奏や徳川家に関わるイベントでの演奏に見られるように、久能太鼓は久能山との関わりが深い。保存会と久能山東照宮との関わりは、保存会発足時に当時の久能山東照宮の宮司であった松浦国男さんから寄付があったことから始まった。保存会の発足後は東照宮の祭事での演奏を依頼されるといった関わりが続いていた。また、保存会がそろいの法被を制作した際には、久能山のお膝元であることをアピールするために、久能山東照宮から許可を得て葵紋を使用したいという意見があった。保存会は連合町内会に所属する組織ということもあり、自治会から東照宮に掛け合う形で交渉することとなり、正式に葵紋を使用する許可を得ることとなった。こうした関わりもあり、松浦さんは保存会の名誉会長に就任することになり、松浦さんが宮司を退いてからも、東照宮の宮司が名誉会長を歴任している。また、前宮司である落合偉洲さんが第12代宮司に就任した際には祝賀会に参加し、演奏を披露するなど深い関係を保っている。



写真2 葵紋が染められた久能太鼓保存会の法被（2023年6月4日、吉仲撮影）

## 3 太鼓と人々の関わり

前節までは、保存会がどのように発足し、どのような活動をしているかについて記述した。ところで、今回の調査においては、現在も保存会で活動している人のほか、過去に保存会に参加していた人にもインタビューを行った。そのなかでは、保存会の発足時には結婚を機に他地域から久能に移住してきたメンバーが多かったことがわかった。本節ではこの点に着目し、現在も保存会で活動しており、県外から久能へ移住してきた西岡茂さんと海野伸光さんへのインタビュー内容を取り上げ、それぞれが保存会に参加した経緯、保存会を通して生まれた人間関係やその変化について述べる。

### 3.1 久能の人々との関係の始点

はじめに取り上げるのは、現在、保存会の代表として、演奏依頼の受付、練習場所の管理、連合町内会への活動報告などを行っている西岡茂さんである。西岡さんへのインタビュー内容からは、保存会が西岡さんにとって久能の人々との関わりを生み出す場であったこと、コロナの影響や高齢化により保存会の継続が難しくなっていることなどがわかる。

#### 〈事例1 西岡茂さん（男性、70代、西平松在住）〉

西岡茂さんは高知県の出身である。就職後、静岡市の支店に配属されたことがきっかけで、静岡に移り住んだ。結婚後は静岡市内の支店近くのアパートに住んでいたが、義両親の体調が優れなかったこともあり、妻の実家のある久能の西平松へと引っ越した。保存会には引っ越し後の1996年6月に参加したという。

参加の直接のきっかけは、保存会を設立した海野安男さんがよく義父の家に飲みに来ていて、そのときに太鼓をやってみないかと誘われたことだったという。西岡さんは久能への移住後も会社員として働いており、地元の消防団や「西平松友の会」（西平松の住民が盆踊りや旅行などの娯楽を企画・実施する会）などには参加していなかったため、保存会にも知り合いは1人もいなかったという。それゆえ、太鼓の経験はなかったものの、地域とのつながりが生まれることを期待して保存会への参加を決めたと語ってくれた。

西岡さんは、保存会での練習や会話だけでなく、練習後に他のメンバーたちに誘われて根古屋の国道150号線沿いにあった丸福ラーメンへ行き、一緒にお酒を飲んだりしたことも、久能に住む人とつながるきっかけになったという。それだけでなく、暮らしのなかで人との関わりや趣味に費やす時間が増え、楽しみが生まれたという。さらに、メンバーと会話をすることで自分とは異なる考え方に触れ、自身の考え方にも変化が生まれたと語ってくれた。それだけでなく、保存会に参加したことをきっかけに、地域の活動にも参加するようになったとも語ってくれた。

しかし、現在はメンバーの減少や飲み会の場となっていた丸福ラーメンが閉店してしまったこともあり、こうした練習以外の交流の場はなくなってしまった。さらに、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、保存会の活動が練習も含めて3年近くも停止していたため、再開後も戻ってきていないメンバーも多いそうだ。

また、西岡さんによれば保存会が持つ大きな課題は、メンバーの減少と高齢化の2つであるという。メンバーの減少については、先述したコロナによる活動停止の影響もあったが、そもそも新たなメンバーが加入せず、今いるメンバーも高齢化していることが根本的な問題であるという。若い世代の減少は、太鼓の演奏にも影響を及ぼしている。年を取ると力強い音、スピード感のある振り付けができず、迫力のある演奏が難しくなるのだという。それだけでなく、保存会の活動を盛り上げるには、新曲の作成などの新たな取り組みが必要だが、メンバーが高齢化しているためにそうしたことに費やす体力がないだけでなく、もし新曲を作ったとしてもそれを新しく覚えて演奏するのは難しいという。それゆえ、活動を活性化させる若い世代を呼び込みたいが、彼らへのアプローチができない苦境に立たされている。メンバーの勧誘を試みようとすることもあるが、西岡さん自身が保存会以外での久能の人とのつながりが少なく、またつながりがあったとしても同世代の人がほとんどであるため、勧誘のしようがないという。また、子どもを勧誘する場合は練習場所に送迎する親の同意が必要となるうえ、親が同意したとしても中学生の場合は部活動との兼ね合いにより途中で辞めてしまうことが多いという。

保存会は苦労して作った組織であるほか、「久能太鼓」をはじめとした多くの楽曲は保存会のメンバーだけが演奏出来るものであるため、それらをなくしたくないという。それゆえ、「久能太鼓」の名が残るのであれば、静岡大学の和太鼓サークルなど外部の組織にも楽曲を教え、残していきたいと語ってくれた。

西岡さんの語りからは、久能の少子高齢化もあり保存会のメンバー、なかでも久能在住のメンバーが減少していることがわかる。また、子どもの入会に関しては、練習時間や自宅から練習場所までの距離などが障壁となっていると考えられる。これらの課題から、現在の保存会は持続が難しくなっており、保存会や楽曲を残すために苦心していることがわかった。

また、保存会という新たな組織へ加入したことが、西岡さん自身にこれまで関わりを持つことのなかった久能の住民とのつながりをもたらしたことがわかった。メンバーとの飲み会など、保存会を通じて新たな関係をつくり、深めることができたことがうかがえる。一方で、丸福ラーメンの閉店やコロナによる活動停止により、交流する機会が減ったことで現在はそのような関係を築きにくくなっている。

### 3.2 保存会の継続に向けて

続いて、初期からの保存会メンバーである海野伸光さんの事例を紹介する。海野さんへのインタビュー内容からは、西岡さんと同様に、保存会の活動が久能の人との関わりを生む場となっていたこと、農家が多いという久能の特色が保存会のメンバー減少に影響しているといったことがわかる。

〈事例2 海野伸光さん（男性、70代、西平松在住）〉

海野伸光さんは、事例1で紹介した西岡茂さんと同様、初期の頃から保存会に参加し、現在も保存会で活動を続けているメンバーである。伸光さんは宮崎県の出身であり、宮崎のデパートの仕入れ部門で働いていた。そのなかで、静岡市内の家具メーカーの営業と同級だったことがきっかけで仲良くなり、今とは違う仕事がしてみたいと相談したところ、同じところで働かないかと誘われたため静岡駅近辺へと移住してきた。その後、見合い結婚をし、妻の実家のある久能に住むようになった。かつての久能連合町内会の会長で、久能太鼓保存会の発案者でもあった海野安男さんとは、結婚時に仲人を務めてもらったことで知り合ったという。また、海野というのは妻方の姓である。安男さんは妻方の親族でもあり家が隣り合っていて、隣組でも関係がある人だった。

西岡さん同様、伸光さんもまた、久能へ引っ越したあとも家具メーカーで勤務しており、ひと月の半分ほどは出張で久能から離れていたという。それゆえ、消防団などには参加しておらず、保存会に入会した際、メンバーで面識があったのは子ども同士が同級生であるために顔見知りだった1人のみだったという。保存会へは、安男さんから勧誘を受けたことをきっかけに、太鼓に興味があったため1996年6月頃に参加したという。

伸光さんも丸福ラーメンへよく来店していた。丸福ラーメンへは、子ども同士が同級生で顔見知りだったメンバーに誘われたことをきっかけに行くようになり、その後は練習のない日も来店するようになったという。丸福ラーメンに集まるが多かったメンバーは、伸光さん、西岡さんを含め5名ほどであり、演奏の依頼が自分に来たことを報告したり、イベントでどの楽曲を演奏するのかわかるといったことや、前回のイベントでの演奏についての反省などを話したりしていたという。そうした反省会が楽しいものだったと語ってくれた。

伸光さんは、富士宮市の太鼓チーム「エンゼル」から指導に来ていた鈴木孝長さんが久能での指導から外れたあと、「久能の舞」、「祝い太鼓」を作曲するなど、新たな楽曲を作る役割を担っていたという。新しい曲を作る理由としては、同じイベントで何回も同じ曲を演奏すると、相手も慣れてしまうことを挙げていた。それによって、太鼓が面白くないと言われることが嫌であるため、新しい曲、良い曲を作りたいと思いながらやっていたと語ってくれた。作曲の経験がなかったため、新曲の製作は試行錯誤しながら進めていたそうである。そうした既存のリズムを組み合わせる新しいものを作る作業が楽しかったという。しかし、現在は新曲を作ることは難しいと感じているという。その理由の1つとして、高齢になり記憶力が低下したために、新たな楽曲を作ったとしてもそれを覚えることは難しいと語っていた。

ところで、伸光さんは自分や西岡さんが保存会で活動を続けられているのはサラリーマンであったからだという。サラリーマンは土日が休みであり、休日開催のイベントでの演奏に問題なく参加出来たが、農家は休日が定まらず演奏に参加できないことが多いからだという。農家の人がイベントで演奏するには、親などの家族に農作業を任せなければならない。しかし、年月が経つと、親が亡くなったり施設に入所したりして農作業を任せられなくなる。子どもたちも久能から離れて暮らしていて任せられない。そうしたことから、イベントで演

奏できなくなったメンバーもいたという。そして、イベントに参加できないなら練習しても仕方ない、と保存会をやめる人も少なくなかったという。

メンバーの勧誘については、昔は居酒屋で周囲の人を勧誘していたと話してくれた。しかし、コロナの影響もあり、出かける機会が少なくなった。また、自分の知り合いには同年代の人が多く、若い人を勧誘するのが難しいという。これまでは若い世代のメンバーが同世代のつながりを生かして勧誘していたが、現在は若いメンバーが減少しているため、若い人の加入のきっかけがなくなっているという。また、現在はメンバーの募集は継続しているものの、勧誘活動は行っていない。その背景にはコロナの影響によって活動が停止していたためにメンバーが急激に減少したことがある。これまでにない状況であるため、どう手を打てば良いのかがわからないそうで、勧誘する場を考えるだけの力もなくなっていると語っていた。

海野伸光さんも西岡さんと同様に、結婚を機に久能へ引っ越してきた。保存会は、そのような他所から久能へ移り住んできた人が地域の人々とのつながりを得る場所となっていたこともうかがえる。また、メンバーの減少に関わる話からは、西岡さんと同様に、世代間でのつながりが薄いことから、勧誘が難しい状態であることがわかった。加えて、コロナの影響によりメンバーが急激に減少したことも大きな問題となっている。このような急激なメンバーの減少はこれまで経験したことがなく、対応に困窮している様子がうかがえた。また、保存会のもつ課題が、久能全体が抱える少子高齢化の問題、農家が多いといった地域の特徴とリンクしていることも明らかになった。

また、海野さんも丸福ラーメンを交流の場として挙げていたことから、丸福ラーメンが保存会発足時のメンバーが集まる場、組織の運営を考える場だったことがわかる。また、指導役であり、作曲をしていた鈴木孝長さんが脱退して以降も、伸光さんが楽しく太鼓を演奏し続けるために力を入れてきたことがわかる。

#### 4 考察

ここまで、第2節では保存会がどのように発足し、現在まで活動してきたのかについて記述した。保存会は1996年に発足した比較的新しい創作太鼓の組織であり、発足時は外部から移住してきた男性が多く参加しており、「婿太鼓」と呼ばれることもあったとわかった。さらに、久能小学校を練習の場とし、主に久能でのイベントや久能山東照宮と関わるイベントで演奏していること、現在はコロナによる活動停止もあり、メンバーが減少していることがわかった。また、第3節では保存会メンバーのうち、他所から久能へ移住してきた経歴をもつ男性2名への聞き取り調査の資料をもとに、保存会の変遷や現状、活動のなかでそれぞ

れの人たちが果たしてきた役割について明らかにしてきた。また、今回紹介した2名だけでなく、保存会に参加したことから新たな関わりが生まれたと話す人がいた。この理由には、保存会が消防団や職業の組織などとは異なり、参加者の職業や居住している場に関わらない組織であることが大きいと考えられる。このことは、発足時から参加している長島康晴さんの、「農家組合で関わりのある人はいたけど、大工であったメンバーとは保存会に入らないと知り合うことはなかった」といった言葉からも見て取ることができる。また、新たに生まれた組織であったことから、久能とのつながりがなかった人にも入りやすい組織であったと考えられる。つまり、創作太鼓の経験のある人がおらず、元から久能に住んでいた人と新たに移り住んできた人たちが対等な関係で交流できる環境となりえたといえるだろう。

また、地元の人々よりも他所から移り住んだ人が多く参加した理由としては、久能には農業従事者が多いことが挙げられる。海野伸光さんが「農業は休日が定まらない」と語ったように、農家は太鼓を演奏する時間を確保しにくいことが参加の障壁となっていたと考えられる。

保存会がつながりを生む場となっていたことには、和太鼓という楽器の特性も影響していたと考えられる。演奏するなかで他の人と音を合わせる、掛け合う、振り付けを合わせるといった体験が、集団の一体感を生んだと考えられる。

## 5 おわりに

今回の調査から、保存会が持つ課題は、久能全体が抱える少子高齢化の問題や、農業を主な産業とする久能の特徴に由来していることがわかった。それゆえ、保存会のメンバーが減少していることを仕方のないこと、止められない流れと捉える声も多く聞かれた。メンバーも保存会の存続を目指しているものの、久能全体が抱えている問題は容易に解決できない。そうしたなかで、保存会の存続ではなく、楽曲だけを残してゆく考えも出てきており、衰退を受け入れながらも存続する道を模索している様子がうかがえた。

## 謝辞

今回の調査を実施するにあたり、多くの方々にご協力いただきました。練習へ参加させてくださった久能太鼓保存会のメンバーの皆様、複数回のインタビューや急な申し出にもかかわらず、快く時間を作っていただき、インタビューに応じてくださった皆様、本当にありがとうございました。

## 参考文献

静岡市立南中学校区青少年健全育成会

2002 『育成会だより』No.43、静岡市立南中学校区青少年健全育成会。

静岡新聞

1997年3月31日 「体育館お披露目太鼓演奏や講演 静岡の久能小」静岡新聞社。